

## 教室で文学を学ぶ意義

——「現代の国語」騒動から——

高野昌彦

はじめに

二〇二一年九月十二日の朝日新聞朝刊に、「高校新必修科目『現代の国語』教科書に小説掲載の波紋」と題する記事が載せられた。

それによれば、第一学習社の「現代の国語」の教科書四点のうち一点に五つの小説が掲載された。これに対し一部の教育委員会から文部科学省に、「小説が載っているが採択してもいいのか」と問い合わせがあったとある。

また、八月十三日には一般社団法人教科書協会が文科省に、「指導要領の想定との関係で、発行者間で疑義が生じている」ので見解を明らかにするよう求めたとある。

これに対する文部科学省の見解は、「小説が盛り込まれることは

想定していないが、文学作品の掲載が一切禁じられているわけではない」というものであった。しかし、「今回の事態を重く受け止め、今後はより一層厳正な審査を行う」と回答したとのことである。

ということは、おそらく今後、「現代の国語」と「言語文化」に入れるべき文章の分野が例を挙げて明示されるのだろう。そして、「現代の国語」に小説が入るチャンスは無くなっていくことになるかと予想される。

だが、果たしてこの結果で良いのであろうか。そもそも第一学習社のみが小説を掲載するような事態はどうして起こったのだろうか。筆者は、ここに今回の国語の科目区分改訂における問題、ひいては文学の位置付けの問題があると考える。

結論から言えば、文部科学省は文学の位置付けを改め、第一学習社のように「現代の国語」に小説を入れた教科書を承認すべきであ

る。本稿ではこの視座に立ち、教室で文学を学ぶ意義を論じる。尚、本稿では便宜上、近代以降の「現代文」とされる文学を小説と表記する。それ以前の「古典」とされる古文・漢文を含む場合は文学と表記することにする。

## 一 問題の経緯

「現代の国語」に小説を入れた教科書を承認すべきとする本稿の主張の妥当性を確認するため、「高等学校学習指導要領（平成30年告示）<sup>②</sup>」（以下「学習指導要領」）の単位数と含まれる分野について確認しておく。

「現代の国語」（二単位）≡評論文・実用文

「言語文化」（二単位）≡小説・古文・漢文

以前の必修科目であった「国語総合」は、四単位で評論文・小説・古文・漢文を扱っていた。よって「言語文化」に小説・古文・漢文の文学分野が圧縮して入れられたことになる。文部科学省が文学を軽視していると考えられるのも当然の科目編成である。そしてここから今回の「現代の国語」騒動が起きたのである。

次に、前掲の朝日新聞記事に拠り経緯を振り返る。文部科学省が行った「学習指導要領」解説の説明会で、「現代の国語」はノンフィクションの科目であり、小説が入る余地はない」と説明したと

ある。そして第一学習社の教科書が検定に合格した理由の説明においては、「文学作品の掲載が一切禁じられているわけではない」との見解を述べている。「現代の国語」はノンフィクションの科目で小説が入る余地はないと説明したにも関わらず、「文学作品の掲載が一切禁じられているわけではない。」と言っており矛盾する。

そして、冒頭で引いた二〇二一年九月十二日の「朝日新聞」朝刊で、第一学習社が掲載理由を述べている。それは「教育現場のニーズが非常に強く、不合格を覚悟でチャレンジする価値があった」というものであった。第一学習社は教員のニーズを感じ取り「現代の国語」に小説を掲載したのである。検定が通れば多く採択されるとの目算があったから小説を掲載したのである。

この騒動の結果はどうであったか。例の小説が掲載された第一学習社の「現代の国語」教科書が、全国で最も多く採択されることとなった。冒頭の「朝日新聞」朝刊によれば、採択状況は十九万六四九三冊で、最大手の東京書籍の十八万三七一四冊を上回ったのである。結果、目論見通り最多の採択を得る結果となった。

この結果に対し、ある社の編集者は「正直者が馬鹿を見た」と述べたそうである。また文部科学省はこのような事態に「特段の対応は考えていない」と答えたとある。結局文部科学省の曖昧な説明に各社が振り回された結果となった。以上の経緯については、読売新

聞や毎日新聞<sup>③</sup>でも確認できる。同じ文言も掲載されていたので事実と考えられる。

第一学習社が教員のニーズを感じて今回の教科書を制作したという点は重要である。冒頭に引いた朝日新聞も指摘しているが、文部科学省の思惑と現場の教員のニーズがずれていることがはっきりしたからだ。

作家の石井光太氏は日本女子大学附属中学校・高等学校を取材し、次のような校長の椎野秀子氏のコメントを掲載している。<sup>④</sup>

本校が国語科においてとりわけ文学作品を重視しているのは、人間にとって根源的な力を養うのに最適だと考えているからです。フィクションでもノンフィクションでも、優れた作品は、生徒の中にあるやさしさ、想像力、忍耐力といったものを育ててくれます。それが生徒の人としての力を総合的に成長させていくと考えています

現場の教員であれば、椎野氏が言うように文学教材の重要性を認識している。だから第一学習社の教科書採択数が最も多くなったのである。

## 二 問題の本質

今回の「現代の国語」に小説が入った騒動の経緯は前節の通りで

ある。しかし、この問題の本質は、読解力を一面的に捉え、性急に読解力を上げようとする文部科学省の姿勢にある。この点について以下に整理する。

【「国語編」高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説】「第一章総説 第二節国語科改訂の趣旨及び要点」<sup>⑤</sup>では、中央教育審議会答申が引かれ、OECDによる学習到達度調査PIISAの結果に触れている。そして二〇一五年のPIISA調査の結果として、「前回調査と比較して平均得点が有意に低下していると分析がなされている」とする。その理由としては、コンピュータテスト（CBT）において複数画面から情報を取り出すことが苦手であることが挙げられ、読解力において改善する課題が明らかになったとされている。そして高等学校では、「文章の内容や表現の仕方を評価し目的に応じて適切に活用すること、多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に基づいて的確に表現すること、国語の語彙の構造や特徴を理解すること、古典に対する学習意欲が低いことなどが課題となっている。」とする。その原因としては、「教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向」があることを挙げ、授業改善の必要性を説く。

右の分析から、文章の評価と活用、表現力、語彙の理解、古典の

学習意欲を課題と捉えていることが分かる。したがって、評論文・実用文と文学を分けるのはこの課題に対応するためということになる。

これに対し大橋崇行氏は、

このとき、中教審答申で用いられた「テキスト（情報）」という表現は、PISAの試験で用いられる「texts」の枠組みを反映しつつ、誤訳したものだと考えられる。（傍点ママ）

と述べている。中央教育審議会の答申では「テキスト（情報）」と訳しているが、PISA調査で用いられるテキストという用語は、情報に文学的読解の意味合いを含めるために用いられていると言う。つまり答申は、読解力を情報の意味にだけ解し、文学を除いてしまったのだ。

また、松下佳代氏<sup>⑦</sup>は二〇一二年までのPISA調査の展開について、

そこには、文化的リテラシーが重視する、読み書きの背景知識となる特定の文化の知識や、批判的リテラシーが重視する、対象世界をどんな言葉や知識によって意味づけるかをめぐるポリティクスという視点が欠落している。

と指摘していた。PISA調査の結果を重視するあまり、論理的実用的読解力ばかりに目が向くことに警鐘を鳴らしていたのである。

今回の「学習指導要領」の改訂や大学入学共通テストの内容をいち早く分析し、批判し続けているのは紅野謙介氏である。紅野氏は、文科省視学官の大滝一登氏が新井紀子氏の『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』を引き、係り受けや照応、語句や文が示す意味同士の関係を正確に理解することを重視している点を問題視し、

そうであるならば、基礎的な読解力をつけるために短い文章から始めなければならないはずだ。ところが、これまでの「センター試験」の問題よりも多い分量の問題が用意され、図表やグラフ、法律や公文書など、種類も質も異なる資料を読み込みながら設問を解く形式になるというのでは、まったく逆の方向ではないか。

と批判している。新井紀子氏の開発したリーディングスキルテスト（RST）から大学入学共通テストのような複数の資料を比較する問題が作られたとすれば、これは紅野氏の言うように方向性としては全く逆である。

新井紀子氏<sup>⑧</sup>はむしろ、読解力を基盤とするコミュニケーション能力の必要性を説いている。

では、現代社会に生きる私たちの多くは、AIには肩代わりできない種類の仕事を不足なくうまくやっていけるだけの読解力や常識、あるいは柔軟性や発想力を十分に備えているでしょう

か。(略)

問題は読解力を基盤とする、コミュニケーション能力や理解力です。(傍線筆者、以下同じ)

新井氏がコミュニケーション能力の必要性を説いたきっかけは、大学生のコミュニケーション能力の欠如にあった。ここから教科書を読む能力が足りないという結論に至ったのである。社会が共同体であることを考えると、互いにコミュニケーションを取る能力が必要であることは間違いない。

ここまで見てきたところから、PISSA調査とRSTを根拠として、その対処としてテキストを情報に限定し、逆の方向性の問題を作成することが起っていると分かる。特に大橋氏が指摘するテキストの読み違いの指摘は重要である。先に、「学習指導要領」でPISSA調査の結果から読解力が低いと分析されていることを挙げたが、この読解力に文学を含まず評論文・実用文のみで考えたのは誤読であったという事になるからである。

「現代の国語」の評論文・実用文で読解力を付け、「言語文化」の小説・古文・漢文では文化を学ばせようとする意図は「学習指導要領」における「言語文化」の目標<sup>⑩</sup>に表れている。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成す

ることを目指す。

(1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする。

(2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。

(3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わりとうとする態度を養う。

「言語文化」でこのような目標が掲げられる背景には、教室で文学を読む時間を縮小し、知識・技能を身につければ良いとする考えがある。二〇一九年一月十四日に明星大学で「古典は本当に必要なのか」というシンポジウム<sup>⑪</sup>が行われた。このシンポジウムでは、古典教育の肯定派と否定派が議論を戦わせる形で行われた。

古典否定派の一人である猿倉信彦氏は、古典教育を否定する理由に、もつと他に学ぶことがあると述べている。また理系の人間は外国人と接する機会が多いから文化的インターフェイスが非常に大事だと述べている。にもかかわらず人文学的知識がなく日本文化を

売り込むことができない。ここから古典よりも学ぶことがあると言いたいようだ。

先に引いた「言語文化」の目標は、猿倉氏の指摘する人文学知識の不足を改善しようとするかのように掲げられている。そしてこのような背景には、文系の学問は実社会の役に立たないという考えがある。それは文系学部廃止報道などの動きから窺える。

二〇一五年六月八日に文科省が各国立大学法人学長に出した「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」<sup>12)</sup>という通知から文系学部廃止の憶測が広がった。これを分析した吉見俊哉氏によれば、「文系は時代に取り残されているという認識が社会全体にある。」「一般社会に、『理系は役に立ち、文系は役に立たない』との通念が蔓延してきた。」<sup>13)</sup>ことがこの憶測の背景にある。

このような、文系学問を役に立たないと考える側とそうでない側とでは、それぞれの尺度が異なっている。それは短期的に役に立つか、長期的に役に立つかの尺度である。この意味で、先に引いた吉見俊哉氏の同書における指摘は傾聴に値する。

目的遂行型の知は、短期的に答えを出すことを求められます。

しかし、価値創造的に「役に立つ」ためには、長期的に変化する多元的な価値の尺度を視野に入れる力が必要なのです。ここにおいて文系の知は、短くても二〇年、三〇年、五〇年、場合

によっては一〇〇年、一〇〇〇年という、総体的に長い時間的スパンのなかで対象を見極めようとしてきました。これこそが文系の知の最大の特徴だと言えますが、だからこそ、文系の学問には長い時間のなかで価値創造的に「役に立つ」ものを生み出す可能性<sup>14)</sup>があるのです。

文学を縮小し評論文・実用文を重視する今回の改訂は、短期的に答えを出そうとする目的遂行型に他ならない。長期的尺度を持った価値創造型の思考ができなければ、目先の知識や技能だけで満足し、時代が変わればそれこそ役に立たなくなるような人材しか育てることはできない。この点を見誤り、「現代の国語」を評論文と実用文の科目にし、性急に読解力を向上させようとしているのである。そして文学を、文化的知識を習得する科目とのみ定め、「言語文化」の中に押し込めてしまった。これが今回の「学習指導要領」における問題の本質である。

### 三 教室で文学を学ぶ意義

結論から言えば、教室で文学を学ぶ意義とは、①「文化の共有」、②「心情の疑似体験」、③「想像力の養成」にあると考えている。

一つ目の「文化の共有」<sup>15)</sup>について、筆者はかつて村上春樹の「鏡」の授業実践から論じた。これは例えば、一人一人が一話ずつ

怖い体験を話していく筋を読んだ時、生徒が百物語を連想したというものである。このような連想ができるということは、その生徒が文化を共有している証左である。「鏡」では本物の百物語の様式を踏襲しているわけではない。それでも生徒が百物語を連想できたのは、百物語を知識としてではなく文化として理解していたからである。

渡辺麻里子氏<sup>16</sup>は古典の共通理解を「文化コード」と呼び、「古典の世界独特の「文化コード」（＝共通理解）の蓄積は、長い時間をかけて行われ、日本の文化を形成してきた」と述べている。

渡辺氏の言う「文化コード」は、本稿の「文化の共有」と同じものと捉えている。文化とは一朝一夕に出来上がったものではない。歴史が続く中で、我々日本人の間に形成されて行った様式や精神である。その文化を教室で学び共有することは、日本を知ることと同義であり、日本の様式や精神を身に付けることになる。

サイエンス・ライターのガイア・ヴィンス氏は『進化を超える進化<sup>17</sup>』において、

あるコミュニティで何世代にもわたって蓄積された文化的知識は、その集団が情報を集め、環境を読み、食物や住みかを見つけるのを助ける。

と述べている。文化的知識によってその集団は生き残ることができ

るのである。またヴィンス氏は、

人間の脳の並外れた可塑性は、祖先の知能と文化の発展を促した。しかし、それが意味するのは、わたしたちが生き残るにはほとんどのことを他者から学ばなければならないということだ。

とも述べている。私たちは生き残るために学ばなければならないのである。これが「文化の共有」である。

二つ目の「心情の疑似体験」は、文字通り文学を読むことで登場人物の心情を体験することである。

『羅生門』『舞姫』『ころ』『竹取物語』『枕草子』といった、作品名を挙げればすぐ内容が浮かぶ文学の定番教材。これを教室で丁寧に読むことで、登場人物の心情を疑似体験することができる。

以下、高校一年生が学ぶ文学の定番教材「羅生門」<sup>18</sup>を例に取り、下人の心情の変化を学ぶ過程を再現する。

下人は、それらの死骸の腐乱した臭気に思わず、鼻を覆った。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を覆うことを忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとく、この男の嗅覚を奪ってしまったからである。

老婆と遭遇する場面である。臭気を放つ死骸を目にした下人に、鼻を覆わせることを忘れさせるほどの「ある強い感情」とは何か。

生徒にはそう問いかけ次の場面を読み進める。

下人の目は、そのとき、初めて、その死骸の中にうづくまっ  
ている人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、  
白髪頭の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火を  
ともした松の木切れを持って、その死骸の一つの顔をのぞき込  
むように眺めていた。髪の毛の長いところを見ると、たぶん女  
の死骸であろう。

「下人の目は」という語句で、生徒の目は下人の目となる。そし  
て、死骸の中にある気味悪い老婆の描写。この老婆が死骸の顔を覗  
き込んでいる。この描写により生徒はいよいよ下人と同じ感情を持  
つ。

「下人は、六分の恐怖と四分の好奇心に動かされて、暫時は息を  
するのさえ忘れていた。」と次にあり、大抵の生徒はこの時の下人  
の心情としてこの箇所を挙げることができる。「六分の恐怖と四分  
の好奇心」という具体的な数字で表された下人の心情は理解しやす  
い。そして、死体置き場と化した羅生門の凄惨な雰囲気と、不気味  
に描かれた老婆の行動から、生徒は下人に感情移入して読むことが  
できる。

『羅生門』によるほんの一部の授業実践からではあるが、作品を  
丁寧を読むことで、生徒が登場人物に感情移入し、その心情を疑似

体験できる例を示した。

精神神経科学を研究分野とする高橋英彦氏は、文章と情動の関係  
について次のように述べる。

言い換えれば、これらの自己情動を適切に認知したり、体験す  
るには、心の理論の能力、つまり、相手の立場に立って相  
手の気持ちを探察したり、理解する能力が不可欠であると言え  
る。このような他人の立場に立って他人の気持ちを推し量る能  
力は物語や映画の登場人物に感情移入したり、ストーリーの展  
開を予測する能力そのものでもあり、自己意識情動の神経基盤  
を理解することは、登場人物の内的状態や文脈を理解する神経  
基盤の理解にもつながると言える。

高橋氏は、他者の気持ちを推し量る能力と物語の登場人物に感情  
移入する能力が同じだと述べている。教室で文学を読むことで、登  
場人物のそれぞれ多様な心情を疑似体験する。この体験を積むこと  
は、他者の気持ちを推し量る力を向上させるだろう。

また、教員でありコンピュータ教育にも携わった戸塚滝登氏は、  
子どもに「かさこじぞう」の劇を演じさせると、登場人物の心を理  
解できるようになる事例を挙げる。それは他人に共感する際に働く  
神経細胞であるミラーニューロンが原因だとし、次のように結論付  
ける。

そして、ミラー・ニューロンの発見が教育と子育てにもたらす重大な結論の一つは「子どもは物語を通して心も心を学べるのだ」という強い生物学的な根拠がもたれませんか。

教室で文学を読み登場人物の心情を疑似体験することで、戸塚氏の言うように「心を学べる」のである。これが「心情の疑似体験」である。

三つ目は「想像力の養成」である。想像力は文学を読むことでのみ養成されるものではないが、文学は想像させる部分の多い教材である。『羅生門』の最後の場面を次に引く。

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起こしたのは、それから間もなくのことである。老婆は、つぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、はしごの口まで、はっていった。そうして、そこから、短い白髪を逆さまにして、門の下をのぞきこんだ。外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。

下人の行方は、誰も知らない。

教室では、必ずこの最後の「黒洞々たる夜」が何を暗示しているかを生徒に考えさせる。また、「下人の行方は、誰も知らない。」について、下人がこの先どうなるかについて生徒に想像させる。

「黒洞々たる夜」については、不吉な暗示ということではほぼ一致

する。下人がこの先どうなるかについては、簡潔に文章を創作させたこともある。中には大盗人となり裕福になった未来を描いた生徒もいた。大抵多いのは、盗人になったが捕まって処刑されたというものであったが。

このように、作品のその後を想像させることは教室で文学を読む際にしばしば行う活動である。他にも行間から登場人物の心情を想像する等、書かれていること以上のことを想像することが多い。文学を読むとは、想像を伴う行為なのである。これが「想像力の養成」である。

この「想像力の養成」については、「学習指導要領」現代の国語1目標(2)にも次のようにある。

論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。

(P33)

「深く共感したり豊かに想像したりする力」を伸ばすのであれば、評論文だけでなく文学も学ぶ方がよい。しかし、このためには授業時間をしっかり確保する必要がある。先に『羅生門』を読む一例を示したように、話の筋を追いつながら丁寧に読むことで、登場人物に感情移入し、心情を学ぶことができるからである。

評論家の三浦雅士氏は読むことについて、

視覚の上に言語の基礎が形づくられたことは疑いようがない。

見ることは読むことである。読むことが決断の前提なのだ。読

むことは対象の意思を測ることであり、意思を測ることは対象

に身を移すことである。例えば読書とは、それを書いたものの

身に乗り移ること以外ではない。

と述べている。文学を読むことだけを述べたわけではないが、「対象の意思を測」り「対象に身を移す」ことは、登場人物の心情を想像したり、感情移入することでもある。

そして、この想像することは、人類にとって非常に重要なことである。ユヴァル・ノア・ハラリ氏は、

書字はこのようにして、強力な想像上の存在の出現を促し、

そうした存在が何百万もの人を組織し、河川や湿地やワニのありようを作り変えた。書字は同時に、人間にとつてそうした虚

構の存在を信じやすくもした。書字のおかげで、人々は抽象的

なシンボルを介して現実を経験することに慣れたからだ。

と述べている。書字の発明が、人間に想像力を与えたのである。そしてこの想像力から生み出される物語が、人間同士が協力することを可能にしたとハラリ氏は同書において述べている。

それでも、祖先の霊や貴重な貝殻についての物語は、サピエ

ンスにとつて大きな強みだった。そうした物語のおかげで、何百もの、ときには何千ものサピエンスが効果的に協力できたからで、それはネアンデルタール人やチンパンジーには望むべくもないことだった。

このように、想像力から形成された物語によって我々ホモ・サピエンスは互いに協力し生き残ることができたのである。人類が協力し合うためには、互いの心情を理解し合い、想像力を持つことが重要である。その力を養うことが、教室で文学を読む意義である。

以上、教室で文学を読む意義として三点を挙げた。これらは、先に引いた吉見氏の「長期的尺度を持った価値創造型の思考」を養成することにつながるものである。

長期的尺度を持った価値創造型の思考を持つためには、まず日本という自分の立ち位置を理解しなくてはならない。足元をしつかり定めてこそ、長期的視野を持ち、何に価値があるのかも分かってくる。①「文化の共有」が必要な所以である。

また、長期的尺度を持つためには、当然未来を想像する力がなければならぬ。③「想像力の養成」が必要な所以である。そして価値創造型の思考を持つためには、他者の心情を理解しつつ、他者と協働することが不可欠である。他者と協働してこそ、相乗的に価値を創造することができる。②「心情の疑似体験」が必要な所以であ

る。

繰り返すが、長期的尺度を持った価値創造型の思考ができなければ、目先の知識や技能だけで満足し、時代が変わればそれこそ役に立たなくなるような人材しか育てることはできない。このためにも、まとまった時間を取り、教室でじっくり文学を読むことが必要なのである。ここからすれば、「言語文化」に小説・古文・漢文を詰め込むのは好ましくない。したがって今後の教科書検定においても、「現代の国語」に小説を入れた第一学習社のような教科書も許容すべきである。

おわりに

国語の新必修科目である「現代の国語」の教科書に、「入る余地はない」とされた小説が掲載された騒動から、教室で文学を学ぶ意義を論じた。文部科学省は「学習指導要領」における「現代の国語」の目標にも、共感力や想像力を伸ばすことで他者と関わり伝え合うことの重要性を謳っている。そうであれば、「現代の国語」に文学教材が掲載されることも認めるべきではないか。したがって、第一学習社の小説を掲載した「現代の国語」の教科書も残し、他の教科書と比較検討すべきだと考える。

最も避けなければならないのは、生徒の学ぶ機会を奪うこと、そ

教室で文学を学ぶ意義

して学力に悪影響が出ることである。「学習指導要領」はまた変更すれば良いかもしれない。しかし、生徒がその科目を学ぶ機会は一生涯に一度である。この点を念頭に置き、目先の学力にとらわれることなく、長期的視野に立って生徒の学力を養成する科目編成を考えるべきである。

今回の騒動が、文学教材の意義を問い直し、教室で文学を学ぶ意義を再検討するきっかけとなることを願う。

注

① 二〇二一年九月十二日「朝日新聞」朝刊(朝日新聞名古屋本社十三版)

② 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)』(文部科学省、P35)

③ 毎日新聞2021/12/13 12:00 (最終更新: 12/13 18:50) <https://mainichi.jp/articles/20211211/k00/00m/040/087000c> 二〇二二年八月十九日最終閲覧)

読売新聞オンライン 2022/1/10 5:00 <https://www.yomiuri.co.jp/editorial/20220109-OYT1T50139/> 二〇二二年八月十九日最終閲覧)

④ 石井光太『ルポ 誰が国語力を殺すのか』(文藝春秋、二〇二二年七月三十日、P285)

⑤ 『国語編』高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説(文部科学省、P6)

⑥ 大橋崇行『PISA型読解力』に結びつく国語教育・文学研究―新学習指導要領の問題点と新しい「読解力」の構築に向けて―(紅野謙介

- 編『どうする？ どうなる？ これからの「国語」教育』幻戯書房、二〇一九年八月十日、P104)
- ⑦ 松下佳代「PISSAリテラシーを飼いならすグローバルな機能的リテラシーとナショナルな教育内容」『教育学研究』八十一巻二号、二〇一五年六月十八日公開、[https://doi.org/10.11555/kyokku.81.2\\_150](https://doi.org/10.11555/kyokku.81.2_150)、二〇二二年二月二十三日最終閲覧)
- ⑧ 紅野謙介「いま『国語』の教育で何が起きているのか」(注⑥、P27)
- ⑨ 新井紀子『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』(東洋経済新報社、二〇一八年二月十五日、P172)
- ⑩ 注②、P35
- ⑪ 古典は本当に必要なのか(明星大学日本文化学科シンポジウム20190114) (<https://www.youtube.com/watch?v=P6Yx3rp9IU>、二〇二二年二月二十二日最終閲覧)
- ⑫ 文部科学大臣下村博文「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しにごと(通知)」(二〇一五年六月八日、[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2015/10/01/1362382\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/10/01/1362382_1.pdf)、二〇二三年二月二十二日最終閲覧)
- ⑬ 吉見俊哉『文系学部廃止』の衝撃(集英社新書、二〇一六年二月二十二日、P57)
- ⑭ 注⑬、P74
- ⑮ 拙稿「日本文学」第六十九号(日本文学協会、二〇二〇年六月)
- ⑯ 渡辺麻里子「日本古典文学のファンを増やすために 文化コードの断絶のなかで」(リポート笠間 特集1 いま全力で取り組むべきことは何か)第六十二号、笠間書院、二〇一七年五月、P13)
- ⑰ ガイア・ヴィンス『進化を超える進化 サビエンスに人類を超越させた4つの秘密』(文藝春秋、二〇二二年六月十日、P84、P86)
- ⑱ 本稿中の『羅生門』本文は、全て「高等学校 精選 言語文化」(第一学習社、二〇二二年二月十日)に拠る。
- ⑲ 高橋英彦「5文章が創発する社会的情動の脳内表現」(学阪直行編『小説を愉しむ脳 神経文学という新たな領域』(新曜社、二〇一四年九月二十日、P96)
- ⑳ 戸塚滝登『子どもの脳と仮想世界 教室から見えるデジタルっ子の今』(岩波書店、二〇〇八年二月二十七日、P141)
- ㉑ 三浦雅士『孤独の発明 または言語の政治学』(講談社、二〇一八年六月二十八日、P420)
- ㉒ ユヴァル・ノア・ハラリ『ホモ・デウス』上(河出書房新社、二〇一八年九月、P202、P194)